特集5

9月出しエダマメ『雪音（ゆきね）』を栽培して

JA秋田おばこ枝豆部会
部会長　清水川 輝雄

地域概要

JA秋田おばこは、平成10年4月に県内1市10町3村にあった20JAがひとつになり広域JAとして誕生しました。(現在は市町村合併が進み2市1町)

秋田県南部に位置するこの地域は、鳥海山系、奥羽山脈に囲まれており、その間を流れる雄物川とその支流である玉川に沿った仙北平野が開けています。この平野は、全国で有数の「あきたこまち」を生産する穀倉地帯であり、豊穣の地と呼ぶにふさわしい地域です。

基幹作物の米はもちろんですが、園芸作物においてもホウレンソウ・アスパラガス・エダマメなど10品目を重点推進作物として、安心・安全な生産および販売に取り組んでいます。

JA秋田おばこ枝豆部会

昭和56年に転作面積の拡大に伴い、旧JA太田町で部会が設立され、現在では管内で約400名がエダマメ生産を行なっています。品質向上、安定生産に努めると共に「安心・安全」に対応した出荷体制を生産者一丸となり実施しており、平成16年には秋田県農林水産大賞、農林水産大臣賞を受賞しました。

『雪音』との出会い

平成15年秋も深まった頃、雪印種苗の北上試験圃場で開催された公開説明会に参加しました。その際、おみやげに持ち帰ったサンプルを数人で試食しました。味・莢の大きさ・色ともに申しぶんないとの結論に達し、来年この品種を試作しようと決定しました。

平成16年に試作を開始しましたが、平成17年は種子量が確保できずほんの一握りの試作にとどまりました。ある程度の面積の作付けは、出会いから4年目の平成18年となり、やっとの思いで数人での作付けが始まりました。

『雪音』の栽培概要

前述のように、平成16、17年の小規模での試作を経て、平成18年から実規模での作付けを実施しました。

品種特性や栽培管理のポイントなどが充分整っていない中、種子に添付された説明を参考に、自らの経験と観察をもとに自己流で栽培しました。一般的には夏の暑さでエダマメに味がのりづらい時期（8月下旬から9月上旬）

▲JA秋田おばこ清水川枝豆部会長（『雪音』の畑にて）

▲雪音の収穫時草姿（莢数多く多収）

▲エダマメと米の間にドリフトガード作物を導入
（ハイグレンソルゴー）

に、食味の良い『雪音』が収穫できる事を目標にし、また草丈が出来過ぎないよう（倒伏しないよう）地力が控えめな畑を選びました。更に、無マルチ栽培とマルチ栽培とを同日播種し生育を比較しました。結果として、マルチ栽培は茎葉の伸び過ぎと雷雨により倒伏し、無マルチ栽培と比較して作業効率が悪いうえにＡ品率が低く、マルチは不要と判断しました。

本年は昨年の反省も踏まえ、より土壌条件の良くない転作田の畑に『雪音』を播種しました。雑草対策も考慮し、懲りずにマルチ栽培にも挑戦してみましたが、生育状況は昨年同様の結果となり、マルチ栽培は伸び過ぎてしまう事を再確認しました。8月上旬の雷雨や収穫を目前にしての8月下旬の集中豪雨により、本年は無マルチ栽培でも倒伏がみられました。倒伏による収量・Ａ品率への影響が心配されますが、収量性の高い『雪音』の品種力で少しでも補えることを期待しています。

今後の取組みと課題

枝豆を作って19年目、はじめの10年位はどんな有望品種でも、自分の作り方に合わず苦労しましたが、播種時期・施肥量などの栽培管理によって、色々な結果になる事を身をもってわかってきました。来年以降も挑戦していきたいと思います。

味を追求して青茶豆が作り出され、消費者はもちろん市場や流通関係者の評価も高まっている今、生産者はそれに応える責任と義務があると思います。秋田県には、『雪音』と収穫時期の似かよった「あきた香り五葉」という秋田県の農業試験場育成品種があります。生産者としては、どのように栽培品種を選択していくか、タイプの異なる品種を消費者にどのように売り込んでいくかという事が今後の課題となります。

また、枝豆部会としても「安心・安全」な生産への取組みとして、エダマメと水田との間に農薬飛散防止（ドリフトガード）作物の栽培を試みています。

生産者は作っていれば良いという時代ではなく、産地間競争の生き残りをかけて、売ることにも視点を据えて作らなければなりません。高齢化による離農、新規就農者の不足の実情から今後の日本の自給率が心配されますが、消費者のニーズに応えるため努力していきます。